

国際耕種での新たな一歩

かれこれ15年も前、青年海外協力隊を終えて、国際協力の道へ進むかどうか迷っていた時、静岡大学(林学)の恩師・角張先生から紹介されたのが国際耕種だった。思いばかりで経験・覚悟もない若造に対して、まず核となる専門性を築いていくこと、実際に経験した人の話を聞いて自分で決断することの大切さを、親身に説いて頂いた。その後、修士課程と JICA ジュニア専門員を経て、どうか国際協力で歩み始めてからも、節目の折には町田の事務所を訪れるようになり、いつしか目標・あこがれのような存在になっていった。

経験を積む中で、特に現場活動でのやりがいを感じる一方で、「日本の技術協力が本当に必要とされているのか…」という懸念を抱くことも多くなった。エチオピアやマラウイで技術協力案件の形成・協議に携わる機会を得たが、相手政府からは、「技術協力よりも資金供与をしてほしい」といった要望が出され、合意に至るまでかなり難航した。国やセクターによって状況は異なるだろうが、多くの援助機関や NGO も活動する中、日本が行う協力の意義・成果が認識されにくくなっている状況をひしひしと感じるようになった。



土壌が疲弊しやすいマラウイの主な換金作物であるタバコ栽培

洗濯や水浴び場として活用されるコンクリート製の灌漑施設

直近に関わったインドネシア案件も同じく立ち上げに苦慮した末、長期専門家として携わることになった。西カリマンタン州の国立公園において森林管理を促進する一方、周辺で急進する森林皆伐とオイルパーム(アブラヤシ)農園開発を目の当たりにした。伝統的にドリアンやタケノコなど林産物を採取してきた住民が、中には農地まで手放し、自給的生活からオイルパーム農園での雇用によって現金収入を得る生活へと転換していった。「農地への賠償が支払われていない」…といった苦情を述べる者もいたが、大半はオイルパーム投資がもたらす恩恵を歓迎した。しかし、調査を通じて実態を探ってみると、同じ村の中でもオイルパームによる収入機会を享受できた人とそうでない人の間で経済的な格差があるなど、必ずしもいい

ことばかりではない状況も見えてきた。多くの住民が短期的にはこれまでにない現金収入を得たものの、長期にわたって多様な便益をもたらす森林資源や農地を失い、また、将来世代が利用できる可能性まで喪失してしまったことが、住民にとって本当に良い選択だったのかどうか、釈然としない思いを抱いていた。技術や知識も重要だが、住民が自分たちの望む生活・将来について適切な意思決定ができるよう、技術協力を通じて包括的な能力向上を行うことが、特に森林や環境保全といった分野では大切になるのではないかと感じている。

また、多くの国でも見られるように、インドネシアでも違法伐採の取締りによる森林行政と地域住民との関係悪化が課題であり、短期専門家の支援も得ながら対話型ファシリテーション能力の向上を目的とした研修を公園職員に対して行った。数名の公園職員が根気よく村に通って対話を続ける中で、少しずつ信頼関係を築き、住民の自発的な行動(生計向上や環境保全)が始まった。国立公園の強硬な態度・姿勢には地元 NGO など悩まされていたところ、このような職員の意識変化を促したことに感謝された。それまで「よそ者」であったプロジェクトが、国立公園に関わる「多様な同志の1つ」として捉えられ、その後の協働管理活動の推進につながった。こうして相手政府と一緒に内側から働きかけることは、日本による技術協力による強みだと認識できた。



現金収入になるドリアンの収穫時期に森林内に仮住まいする家族

本来は適地でない湿地帯に植えられているオイルパーム

また新たな一歩を踏み出すにあたり、森林・自然環境保全分野を核とする少し異業種とも見える自分が、農業分野を主としている国際耕種の一員になることで、より現地の人々の現状・ニーズに適した技術協力を追求する強みになればと思っている。15年越しのご縁に感謝しつつ、皆様のご支援を頂きながら、今後一層励んでいきたい。

(2016年10月 吉倉)